

# あの日 あの時

文 須藤  
絵 植竹

## あの場所で

その日は  
仲の良い友達と  
サイゼリヤで楽しく  
おしゃべりをしていました。  
歯科衛生士になる夢を話したり



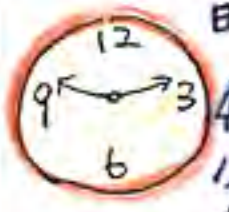
盛り上がったリ...  
その時でした。  
誰かが、私の椅子に  
思いっきりぶつかった  
のかと思うほど身体が  
揺さぶられ次の瞬間



「うわっ！地震っ！」  
と店内に大きな声が  
響いたのでした。  
テーブルの上を  
生き物のように  
動き回る食器を  
どうすることもできず  
ひたすら両手両足を  
突っ張っていました。  
ギシギシ、グシャグシャと  
建物が悲鳴を上げる中で



私の人生は  
サイゼリヤで  
終わるのか？と  
思ったほどでした。  
3月11日午後2時46分。  
東日本大震災。



比白さんは、どこで  
何をしていましたか？  
数日後、若松に  
出勤すると  
衛生士さんたちは  
口をそろえて  
「余震のせいで船酔いしている  
みたい。」と言い、若松ならではの  
活気が半分には思えました。  
冗談ばかり言っている  
先生も何やら  
難しそうな顔を  
しています。  
しばらくすると  
「あかねっ！」と低い声で先生  
が私を呼びつけ「おまえ、自転  
車だよな！今日は帰れ！」と



言ったのです。  
口ええっ、私…  
何か失敗したの？

頭の中がグルグルと  
渦巻状態になり

その後の先生の話は上の空。

何も考えることが出来なくなり  
みるみる目頭が  
熱くなってきました。

あわててコピー室に  
駆け込み、ポロポロと

こぼれてくる涙を一生懸命止め  
ようとしても、次から次へと

大粒の涙があふれてきます。



先輩の衛生士さんが

「あかねっ！何で

泣いてるの？」



先生は、今日の風向きから考え  
るとこの後放射性物質が  
この辺りに飛来する  
可能性が高いから帰りなさい。  
と言ったんだよ。

と笑っています。

さらに先生から  
「マスクは絶対に  
途中で外すなよ！」  
と言われ、くしゃくしゃの顔の  
まま、苦笑いをして

若松を後にしました。  
なんだか先生に  
申し訳ないやら

自分が情けないやら…  
後日、余震の中を先生は  
ブラシヤマスク、日用品や



薬を山の様に積み  
込んで岩手に  
向かったそうです。  
若松の患者さんの  
入れ歯を作る岩手の  
技工所に機材を運び  
かつてお世話になった



大船渡まで1200キロを  
往復してきた後で  
私たちに言ったのは…  
「岩手では思っていたことの  
半分も出来なかったけど  
とにかく今は三郷で  
我々が出来る  
ことを  
やろうっ！でした  
それを聞いて



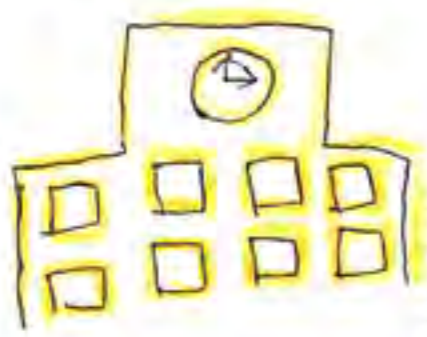
←東北方面←

②



「私もユニクロの社長みたくに沢山義援金を出せたらなあ」と思っていました。しばらくして先生から「新聞を書いたら？」と言われても「衛生士さんは支援物資を集めたり避難所になっている」と

瑞沼市民センターに



先生と出かけたりにいるけど、私は何もしていないどころか足手まといになっている。そんなことばかりが脳裏をかすめていました。



せめて少しでも...

なかなか原稿が進まないでいる

私に先生は、治療に来た広野町の方から頂いた感謝状を見せながら「これって、お前にも届いているんだぜっ！」

「あっ、私も若松のスタッフとして支援に携わる事が出来たんだ！そう思うと、なんだか目の前のモヤモヤが一気に吹き飛んで明るくなってきました。そう言えば「大船渡からのテレビ中継で

大船渡からLIVE



なんとティペの歯ブラシを避難所で使っている人がいたのを見た。と聞かされた先生は、本当に嬉しそうでした。この時初めて私は「たとえ直接「ありがとう」と言われなくてもどこかで繫がっているのが医療人としてのあり方」と気付かされたのです。押し寄せる津波から歯ブラシを持って避難した人は、いなかったと思います。



Thank you Thank you Thank you

被災地では、水や食料だけでなく健康を守る日用品が、当初は不足していたのです。

被災された方々は

歯も磨けずに  
どんな思いをして  
いたのでしょうか？

震災後の衛生士さんや

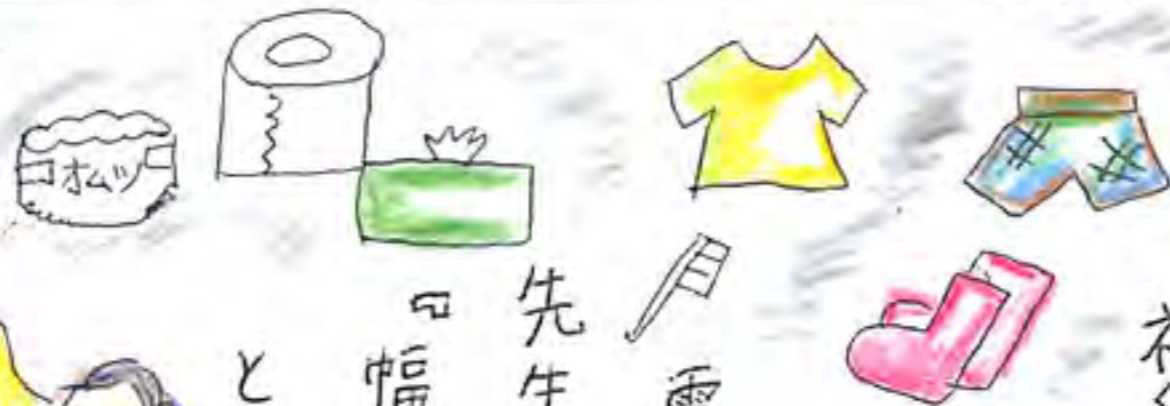
先生を見ていると本当に

「幅の広い仕事だな」と  
と改めて感じました。

これから先、

自分の理想とする

歯科衛生士に



なれるよう  
自分には何が  
今できるのかを  
意識しつつ生きて  
いきたいと思います。

い

今回、何よりも人との  
かわりの大切さに  
気がついたのは、  
サイゼリヤの  
あの瞬間でした。

いつまでたっても

収まらない揺れの中

店員に誘導され

避難していると：

両手に子供を抱えて



パニック状態の

お母さんに

1人の学生が

声をかけた後、

ベビーカーを押して

店から出ていきました。

良く見るとその学生は、

私の幼なじみでした。

小さい頃から

「やんちゃ

だったはずの彼が

真っ先に

困っている

親子に気がつき、

当たり前のように

手助けをしていたのですから。

文 須藤紅音

